

インタビュー

アートを通じて

人の心を結ぶ



はんだ・まさこ

1957年、愛媛県西条市生まれ。79年、岡山大学教育学部卒業。日本美術会附属研究所民美（東京）に学ぶ。83年、日本美術会主催の日本アンデパンタン展（東京）で発表活動開始。ローマ、ランズベルグ（ドイツ）などの国際交流展に参加。92年、イタリアへ渡り、国立ウルビーノ美術学院に学ぶ。97年、サツフェラート、ピッコロエウロバ展にて大賞を受賞。「医療福祉生協の情報誌 comcom」（前「医療生協運動」）の表紙絵を97年5月号より担当。「いのち・ふしぎ・いのち・かくれんぼ」「飛ぶ種」などをテーマにした作品を発表するかたわら、地域で「野染め」などの様々なアート体験ワークショップの指導も活発におこなっている。

画家

半田正子

コムコムの 表紙絵を描き15年

富長 半田さんがコムコムの表紙絵を描かれるようになって、今年で15年目を迎えます。これまでをふり返って感想を聞かせていただけませんか。

半田 私がイタリアで生活していた1997年に声をかけていただいて、コムコムの表紙絵を描くようになりました。当時はイタリアで描いて、日本に送っていたんです。あれから15年、いろんなことがありました。イタリアで子どもが産まれ、それから夫が病気になる帰国。夫の故郷である山形に帰り闘病生活を支えていましたが、夫は亡くなって…。しばらくは山形にいたのですが、娘と2人で私の故郷の愛媛に戻って、子育てと創作活動。この15年は、大きな転換がいっぱいあって、私の人生の中でも重要な時期でした。その間、コ

ムコムの表紙絵をずっと描かせていただいたのは、ありがたいという一言に尽きます。表紙絵とともに表紙の言葉も書かせていただいて、平和の問題を考え、いのちを見つめ、自然について思いをめぐらすことができた。本当にいい機会をいただけたと思っています。

富長 イタリアへは、どういう経緯で行かれたのですか？

半田 イタリアに渡ったのは92年です。その2年前に結婚して、新婚旅行でヨーロッパを回ったんです。21日間で7か国、夜行列車ばかりを使っての新婚旅行。そんな中で、北方ルネサンスといわれる北ヨーロッパの国々の宗教絵画をたくさん観ました。どれも荘厳で美しいのですが、教会に見下ろされているような圧迫感とか息苦しさも感じました。それがイタリアに入国したら、建物も、

まちの風景も、すべてが自然の色と調和して、開放的で明るい。すごくいいなと思って、イタリア美術にも魅了されました。それでイタリアでくらしたいという気持ちで募っていったんです。帰国後、ラジオでイタリア語講座を2年間勉強して、その後イタリアで生活を始めました。

富長 イタリアでコムコムの表紙絵を描かれるようになってから2年ほどして、ご主人が病気になる帰国されるわけですね。

半田 そうです。夫は悪性リンパ腫だったので、言葉が通じる日本で治療することになりました。当時、私はまだイタリアの学校に席があつたので、卒論を書くために何度も行っていましたね。夫が闘病でつらい思いをしている時に酷なことをしたと思っています。あ



1994年、ウルビーノ宮殿を背に丘上の公園で（イタリア）



インタビュー 富長泰行

愛媛医療生協
副理事長

の頃、まだイタリアへ帰るつもりでアパートもそのままにしていたのですが、結局夫は亡くなり、後からイタリアの住まいを整理することになりました。

富長 現在、半田さんは故郷の愛媛で創作活動をされています。半田さんというと、やはり水彩画のイメージがあります。水彩画に独自のこだわりがあるのですか？

半田 水彩は使いやすい画材です。匂いもないし、水洗いもできます。表現においても軽やかに、やさしく、すぐイメージを表現できる。「水が描いてくれる」という感じが好きなんです。私の作品という水彩画のイメージ

が強いのは、やはりコムコムのおかげです。コムコムの表紙絵を描きながら、水彩画の技法をずいぶんと工夫してきました。そして、水彩画のテクニックが確立してくると、今度はもっとそぎ落とした表現をしたくなってくるんです。抽象的な形とか様式化した世界を描きたくなったり、私の中で表現の世界がずいぶんと広がったような気がします。

「自遊楽校あるここ」の活動

富長 半田さんはご自身の創作活動とは別に、NPO法人「自遊楽校あるここ」の設立にかかわり、「遊び」

「アート」を通して、人と人の心をつなぐ活動にもとりくまれています。アートによる「まちづくり」という発想は、すごく面白いと思いました。

半田 「あるここ」の「アルコ」というのは、イタリア語でアーチ(弓)の意味。鯨のアーチ「アルコパレーノ」が「虹」なんですよ。

富長 なるほど、アートの人と人をつなぐ「架け橋」のイメージですね。

半田 そのアルコに「ここ」をもうひとつ付けると「あるここ」って、響きがかわいいじゃないですか(笑)。「歩こう」とか、「ここに、ある」といった前向きなイメージもあるし。それで「あるここ」という名前にしました。「自遊楽校」というのは、まさに「自由に、遊ぶ、楽しい、学校」ということです。楽しく、自

由にいきいきと活動することを通して、老若男女関係なく、みんなが元気になる、成長する。そういう場をたくさんつくることで、地域貢献ができないかな、そんな思いで「自遊楽校あるここ」はスタートしました。

アート＝芸術ということでは、肩肘を張るのではなく、自由に遊ぶ中から、イメージを具体化していく。そうすることで心を開放したり、思いを表現したり、他者とコミュニケーションしたり。そういう喜びを体験することができま。そうし。た喜びの体感や共感が、地域を豊かにしていく。そして、アートを通して人と人のつながりが広がっていく。それが地域の住みやすさにもつながると思います。

自由に楽しくアート体験

富長 「自遊楽校あるここ」では、日頃アートに触れる機会の少ない高齢者や小さな

子どもたちに創作活動の場を提供しようと、デイケア施設や幼稚園、保育園などを訪問して「出前アート教室」を開催しています。アートの触れ、創作活動を楽しむ高齢者や子どもたちの反応はどのような感じですか？

半田 「出前アート教室」は、愛媛県の委託事業として実施することができました。デイケア施設に出向いて、型染めしたランチオンマツトづくりなどを指導して、とても喜ばれました。型染めというのは、文字や幾何

学模様を型抜きした紙を布に置き、インクを付けた筆を押し当てるようにして色づけをしています。型をはがす瞬間が、わくわくドキドキしてとても楽しいとみなさんいわれます。子どもたちと型染めをした時は、エコバックやハンカチなどもつくりました。

屋外での「野染め」は、ほんとにいろんな方々に喜んでいただきました。

富長 野染めはどんなふうにするのですか。布に絵を描いていくのですか。



半田 大きな真っ白な布に、みんなで大きな刷毛で染めていくんです。バケツにいろんな色の染料をつくって、思いのままに自由に塗っていきま

す。色と色が重なり合って、思いが溶け合い、みんながひとつになる感じですよ。

最初は「いやだ」といって

いた高齢者の方も、塗りだしたら楽しくなってくるんです。みんな夢中になりますね。子どもたちは最後には自分の手形を押ししたり、いろいろな自由な発想で遊びだすんです。老若男女入り混じって野染め遊びをすると、とても楽しいんですよ。

染めた後、染めた布がいろんなものに発展します。袋

や服やスカーフや旗、鯉のぼりにもなったり。それがまた楽しみなんです。染めた布にアップリケしたり、みんなで作らないでいく作業の中で、会話をしながら心にとま



富長 例えば、健康まつりでスタッフTシャツをつくる場合などにも、みんな

で楽しくオリジ

ナルTシャツをつくるということもできますね。「あるここ」の実践には、活動のヒントがいっぱいありますね。

乳がんを乗り越えて

富長 昨年、半田さんは乳がんが闘病されていたことがかかっています。どういった経緯で乳がんが見つかったのですか？

半田 去年の1月にあれっ!?と胸に違和感を持ったのですが、病院に行ったのは4月。ちょうど「あるここ」の立ち上げなどで忙しい時期だったので、まずいなと思いつつも病院は後まわしに。すごく不摂生していたし、検診もずっと受けてい

なかつたから、これは自己業自得だなと思いました。とにかく、「あるここ」の設立準備を終えて、病院に行ったら組織検査で乳がんだと

いわれ、がんセンターに行きました。5月15日に手術

をして、2週間くらい入院。6月頃から普通に動けたので、予定していたワークシヨップをおこないました。

富長 10月は乳がん月間で、乳がんの早期発見・早期治療の大切さを伝えるためにピンクリボン運動が全国で展開されます。乳がんも早期発見が大切ですよ。

半田 本心にそうだと思

います。乳がんになってから知ったのですが、乳がんはかなり初期の段階から小さな

がんの芽が飛び散っている可能性があるといます。再発したら完治は難しい。だからこそ、早期発見が大事な

んです。ピンクリボン運動は知っていても、自分のこととしてとらえていなかったと反省しています。

富長 乳がんになったことで、創作活動に変化はありましたか？

で、創作活動に変化はありましたか？

から自分のいのちをみつめ、自分らしい作品を創りたい。その中で自然に作品も変化していくと思います。

タテヨコ3・11cmの芸術

富長 今後の創作活動の予定などをお聞かせください。

半田 9月28日から奈良県の生駒で3人展を、その後は東京でグループ展をやります。来年2月には、西条市の文化会館を借りて個展をおこなう予定です。その時には、3・11を忘れないために3・11cmサイズのアート作品



ええるような支援をする。アーティストにできる支援の方法として面白いでしょ。

こうした試みは、私たちもできるのではないかと思いました。そこでギャラリーの方に「私たちもやっていいで

(3・11cmの四角や立方体で表現された絵画や彫刻、陶器など)の展示もおこないます。実は、これは京都の「ギャラリーかもがわ」で開催された「3・11ミニアチュールART展」をヒントにしたものです。この展示会は、いろんなアーティストに声をかけて、300人の作家から3・11cmという小さな四角のアート作品を提供してもらい、500円から1万円くらいの値段で販売。その売り上げを東日本大震災被災地の作家たちによる展覧会開催の資金にしたそうです。創作できる喜びを分かち合

すか」と聞いたたら、「ぜひ、やってください」といってくださった。それで、愛媛のアーティストに声をかけたところ、喜んで参加するとい人がたくさんいたんです。

富長 3・11cmというのは面白いですね。どんな作品が集まるのか楽しみです。

半田 来年2月1日から11日まで西条市でおこなう個展では、会場の一角で3・11ミニアチュールARTの展示やアートマーケットを計画しています。最終日の11日には、チンドン音楽隊が練り歩いたり、柿渋染めのワークショップをおこなったり、みんなで参加できる楽しいアートイベントも計画しています。

アートで祈りと、思いを共有

富長 毎月、半田さんの表紙絵を楽しみにしているコ

ムコム読者の方もたくさんいます。医療福祉生協の組合員・職員にメッセージをいただけますか。

半田 毎月、私の絵を楽しみにして下さる読者の方がいると思うと、本当にありがたいですし、これからの創作の励みにもなります。私は読者のみなさんと思いを共有できるような絵が描けたら、と思っています。

イタリアにいた頃、私は宗教画をたくさん観てすごく感動しました。カトリック信者でもない私が、宗教画に共感するというのは、たぶんそこには何か祈りの形のよさ、普遍的な力があるんだなと感じました。祈りを、思いを共有し、ひとつにするこ

とができる力をアートは持っています。そんなアートの触れ、創造を楽しみ、癒される。それは小さな力かもしれないませんが、そんな体験を積み重ねることができたら、素敵なことだと思います。

富長 お体を大切にされ、これからも創作活動に励み、素敵な作品を見せてください。今日はどうもありがとうございました。

半田正子さんのサイン入り著書 & イラスト集をプレゼント!

『みみをすまして』
日本生活協同組合連合会医療部会
& 『イラスト集』

3名様

本誌綴じ込みハガキにてご応募ください。

